



障がい者千人雇用×地・食べ

農業公社きびの里から委託を受けた就労移行支援事業所「わくわくハンド・ベル」の利用者が、学校給食へ供給される野菜を栽培。障がい者千人雇用と「地・食べ」の両方の側面をもつ取り組みとなっている

障がい者千人雇用

5年で1000人

市では、5年先までに1000人を目標にし、障がいがある人の就労に取り組みんでいます。

5月12日に発足した推進機関の障がい者千人雇用委員会は8月30日、「事業主や市民に理解と協力を求め、雇用の開拓を」などとする中間報告を市に提出。示された指針を取り組みの基本に据えています。推進の取り組みとして、

ハローワーク総社と7月1日から協働で、就労相談をうける就労支援ルームを運営。10月には、事業主への協力要請を行う総社商工会議所、雇用の場を提供する倉敷平成病院と、雇用推進の協定を締結しました。また、障がい者が働くガソリンスタンドや弁当屋などが市内にオープンし、接客や販売などに一生懸命に働く姿が見られます。



賃金を受け取り働ける雇用型の福祉就労施設としてのお弁当屋「憩いの店芳純」。写真はお弁当の盛り付けをする芳純の社員

地産地消の推進「地・食べ」

学校給食に市内産の農産物を

地産地消の推進を掲げ、その第一歩として、学校給食での市内産の農産物使用率35%（重量ベース）を目標に設定し、取り組みを進めています。

市では、作付け計画や集

荷・出荷体制などを所掌する団体として3月22日、「そうじゃ「地・食べ」委員会」を設置。夏までに作付け計画をまとめました。8月以降、この生産に賛同し、市から認定を受けた農家が

秋冬に収穫する野菜の栽培を開始。現在、収穫したキャベツやハクサイ、ダイコンなどが学校給食の献立で使われています。農産物の集荷と給食調理場への納入は、同委員会に

属する農業公社きびの里が担っています。この取り組みは地産地消だけでなく、小規模農家の生産意欲向上や、遊休農地の活用などの効果も期待されています。



学校給食用のキャベツを収穫する生産者

総社市新生活交通「雪舟くん」

買い物や通院で活況

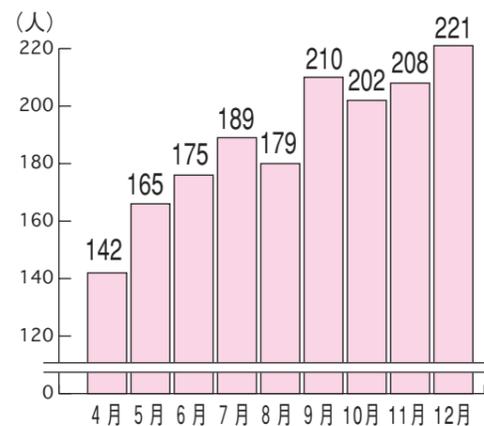
市内の希望する場所から場所へ1人1乗車300円で送迎する予約型で乗合方式の公共の乗り物「雪舟くん」の本格運行を4月1日、スタートさせました。

置や予約の代行などで運行を支援。好調な利用の追い風になっています。新しい公共交通としての他の自治体からも注目されている「雪舟くん」。市では現在、さらに利用しやすくするため、制度の見直しを行っています。



利用者数は徐々に増え、12月には1日平均221人が乗車。買い物や通院などの外出で、市民の身近な交通手段として定着してきました。また、量販店や銀行など6事業所が、待合所の設

雪舟くんの1日平均乗車数



1日平均の利用者数は、4月が142人で、以後ほぼ右肩上がりで増え、9月以降は毎月200人以上となっています。

総社観光大学

観光の伝道師を育成



総社観光大学の受講生。鬼ノ城西門前で

総社の観光とその魅力を学ぶ「総社観光大学」を8月22日から26日までの5日間、岡山県立大学を主会場に開講しました。

民俗学者の神崎宣武さんが「古代吉備のロマン学」をテーマに、見て・食べて・体験する20の講義を設定。鬼ノ城や備中国分寺、宝福寺の歴史遺産をはじめ、座禅、備中神楽、精進料理、総社の歴史などへの理解を深める内容でした。東京や千葉、山口などを



総社観光大学をプロデュースした神崎宣武さんの講義を熱心に聞く受講生

含む市内外から27人が受講。総社の観光の魅力を伝え広める伝道師としての活躍を期待し、修了した24人には、観光ナビゲーターの称号が与えられました。この大学は、総社の観光のあり方を協議した総社観光プロジェクトが平成22年3月、市に提出した報告書で示した提言の一つ。総社の観光を体験した人の言葉によって、総社への観光客を増やしていこうと考えられたものです。

総社流で自立した市をつくっていく